

## Navigating Climate Change: Shifting How We View Buildings

### 気候変動の世界における舵取り：建物の概念の転換

レイモンド・J・コール

ブリティッシュ・コロンビア大学名誉教授、ブリティッシュ・コロンビア大学特別名誉研究者、アメリカ建築系大学協会特別名誉教授、王立カナダ建築家協会フェロー、カナダ勲章メンバー

2020年初頭からの新型コロナウイルス COVID-19の急拡大は、前例のない厳しい平時措置を引き起こした。感染症の発生問題は、以前から予見されていたが、政府は早期の警告に注意を払わず、対応が遅れ、世界的な人的被害と莫大な経済的負担をもたらしている。気候変動の問題は、長らく科学者により警告が出されてきたが、依然として、差し迫った脅威として見なされず、政治的優先順位は低い。COVID-19はピークに達した後、減衰し、散逸するか、ワクチンによって防止され、通常の生活が再開されることが期待できるが、気候変動は、「ピークを打つことなく」進展している問題である。

建物は、私たちの共通の文化的記憶の重要な要素であり、社会の価値感とその創造時における技術的能力の具現化であり、社会が環境問題に対してどのように考え、対応していたかについても表す。建物は人間が遺すものとして最も長く存在する一つであり、建物のGHG削減は、気候変動対策には不可欠であり、最も費用対効果の高い方法の一つである。炭素制約のある世界において、気候変動に適応する建物の設計は、建築家の将来の仕事として、ますます重要となる。

気候変動と地球の健康の危機を乗り越える上で、建築設計の専門家の新しい役割と責任として、機械論的還元的な世界観の中で設定されている現在の環境配慮建築デザインやネットゼロの取り組みから、包括的で統合的な世界観の中で相互参加を尊重、模索するリジェネラティブ・アプローチへの移行が求められる。気候変動と地球の健康に対処するためには、優先順位を再構築し、建物を直接的、間接的に形作る原理原則に疑問を投げかける必要がある。リジェネラティブ・アプローチの主眼は、気候変動によって引き起こされる社会文化システム、生態システムの相互依存の破壊を理解するのに必要なシステム思考を育むことにある。リジェネラティブ・デベロップメントでは、プロジェクトの関係者が何を尊重するかを見出すための先行投資を行い、設計プロセスにおいて何に焦点を当てるべきかを明らかにし、社会-生態システムにおけるプロジェクトの潜在的能力と再生能力の最も効果的なレバレッジポイントを明らかにする。環境戦略において建物は、ネットワーク化されたインフラにおける潜在的資源の結節点として見なされ、既存構造を連携し繋ぐ役割を担い、周辺環境の中で、建物はポジティブな相乗効果を生み出すことを支援する。これにより、建物設計の専門家としての役割と責任が拡大する。従来の狭い範囲の機能的な要求事項に対応するだけでなく、付加価値ある役割を果たすプロジェクトを生み出す。

COVID-19パンデミックによりもたらされた検疫、自己隔離、地域の施設の閉鎖という出来事は、人々がコミュニティでの価値が何か、気候変動の問題がどのように影響するかについて考えることや、さらには地球全体について熟考する機会となっている。パンデミックの長期的な影響は明確ではないが、こうした問題への事前の備えの欠如に起因するシステムの脆弱性、社会的混乱、どのようなサービスや業務が社会に本当に必要であるのか、政府によるコミュニティ支援の限界、そして相互依存関係についての理解の欠如が垣間見えた。それはま

た、建築設計の専門家の将来の役割を明らかにするきっかけにもなり、特に政府によるトップダウンによる統制と近隣スケールのボトムアップ型の社会活動との間を調整する新たな役割が求められる。COVID-19によりもたらされた悲劇、混乱、経済的影響から生じる新しい行動、実践、物語は、時代遅れの世界観を転換することにつながるだろう。

(訳 宇都宮大学 横尾昇剛)